

佳作

敗者復活戦

新村 希望

「なぜこういう風になってしまったのか分からないんです」

四十三歳になる母は泣きながら言った。ふんわりとパーマのかかった黒いショートボブ。うつむくとサイドの髪が顔を覆って表情は見えないが、頬の方にピタリと髪の毛先がくっついていていた。涙で髪が湿っていたのだ。

母は白いブラウスと、紺色の膝丈まであるスカートを着て、ブラウンの健康シューズを履いていた。この白いブラウスと紺色のスカートは何年も

着回しているものだった。

静かに話を聞いていた三浦紀之という院長は、寒い地方の出身だと聞いていた。白髪はくはつだが、その年齢にしては髪かみの量が多く、きれいに七三に分けており、清潔感と品があつた。金色のフレームのリーディンググラスをかけており、その眼鏡は少しだけパープルカラーがかかつていた。体格は中肉中背で、運動神経は良いのではないかと思わせるような雰囲気があつた。それがなぜかという根拠はないのだが、身長が高く、仕草の一つ一つが綺麗であつた。

三浦先生は白いワイシャツの上からブルーのドクターコートを羽織っていた。ネクタイはしておらず、年ははつきりとは分からないが、六十代位に感じられた。

僕と母は、家から車で二時間の距離にあるカウンセリングクリニクにきていた。待合室のフロアリングには大きめの一人掛けソファが九つ、間

隔をあけて並べられていた。大きな窓ガラスからは暖かな太陽の光は入るが、外から中が見えないようにガラスフィルムシートが貼られていた。

待合室の隅には後援運が上がるオーガスタが置かれていた。受付やトイレなどには心身の活性化を促す小さなポトスが置かれていた。待合室にはヒーリング効果のあるバッハの「G線上のアリア」が流れていた。

家から車で十五分ほどの距離にもカウンセリングクリニックはあるのに、なぜ家から遠いこのクリニックを選んだのか。もちろん、三浦先生の評判の良さもあるだろうが、母が、近所の人や知り合いに僕について悩んでいることを知られたくなかったからだろう。母は偏見を怖がる人で、心が弱く、優しい人だった。

僕は決して自分自身が異常な感覚を持った人間だとは思っていないかった。しかし、担任の望月先生は僕に対し「藤崎君。辛くても自分自身に負けたらだめだよ」と言っていたし、母も「私の育て方が悪かったんだ、あ

「あなたが悪いわけじゃない」と言っていた。

その言葉の裏を返せば、周囲から見れば非は僕にあるということだった。問題が起きたのは中学三年の新学期が始まったばかりの時だった。周りの友達新しいクラスで次々に出来上がっていくグループの一員になると努力していた。

女の子たちは、休み時間になると席を離れてグループのリーダー格の子の席に集まり、トランプ遊びをしていた。鏡を見て化粧の練習をする女の子のグループもあった。

男子生徒はベランダにある掃除用具置き場の倉庫の中で煙草を吸ったり、廊下でサッカーをしたりしていた。

先生の話が面白いからというわけではなかったが、僕は勉強が好きだった。塾に通ってはいなかったが、三百名近くいる生徒の中で毎回十五番以

内に入る成績だった。周りからは「ガリ勉」だと言われていた。

それで、僕の周りには虫が好きなハカセというあだ名の子や（虫の博士という由来）、三國志など歴史が好きでいずれは政治家になりたいと野心を燃やすヒーロー（多賀啓之という彼の名前の「啓」と「英雄」をかけた）、ただのスケベオタクのオタクンなど、個性豊かなメンバーが集まってきた。僕は本を読むのが好きだったので、休み時間はオタクンやヒーローが何か目立つことをやろうと計画を立てている横で、黙って本を読んでいた。読むジャンルはだいたい小説だった。その隣でハカセも黙って図鑑を開いては昆虫の写真をみながらそれをスケッチする、というのが僕らのだいたいの過ごし方だった。

ハカセは身長一五二センチ、ひよろりとした色白の体型で、眼鏡を掛けていた。いつも自然と口角が上がっていて、優しそうで気弱そうな印象があった。制服もMサイズなのに、まるで、中学に入学したばかりの新入生

のようなブカブカした着方に見えてしまっていた。

ヒーローの体格はごくごく平均的で、ワイシャツはいつも綺麗にアイロ
ンが掛けられていた。紺のズボンを腰で履くことはせず、ワイン色のネク
タイはいつも締めていた。靴下は白いスポーツソックスだが、汚れている
ことはなかった。髪質はサラサラしていて少し茶色の色素に近かった。一
番清潔感はあるが、根が真面目なことと、常に表情が硬い為に親近感とは
程遠い印象が残念だった。

オタクンはごわごわした髪を少しだけ赤く染めていた。平均よりも少し
だけ背が高く、肉付きが良かった。肌は浅黒く、目は細く、ニキビも多かつ
た。しかし、笑った時の口元だけは韓国の俳優のような綺麗な歯並びで、
優しそうな印象があった。胸元までボタンを開け、大きめのシャツを出し
て、ズボンは腰で履いていた。オタクンは時々靴下の先が破れていること
があった。本人は格好良くありたいと思っていたはずだが、清潔感には欠

けていた。

僕は、ハカセとヒーローの中間といったところだった。身長はヒーローより少しだけ低く、色白ではあるがハカセ程ではない。体格はどちらかといえど、痩身。髪質は柔らかいが癖があり黒い。カットはしていたが、時々中年層から女の子と間違われることがあった。

僕は恰好をつけたいとかそういう風な考え方はあまりなく、自分たちの好きなことをやっていたのだが、周りからは地味なオタク集団だと思われるれていた。だから、恰好のいじめの対象だったのだろう。

クラスのグループには華のあるグループというのがあった。その一員に原幹則という男子生徒がいた。そのグループの中には学年で一番人気のある佐良太陽もいた。

佐良太陽と僕は仲が良かった。太陽はスポーツもできて、顔立ちも整っていて、英語の成績が良かった。男の僕から見ても恰好良かった。

人情に厚く、人気取りではない正義感があり、女子に優しく、謙虚なところがあつた。謙虚なところに関しては、本人にとっては気が弱いと言われているみたいで好きじゃないと言つていた。

太陽は、ルックスで言えば凡人の域から抜きんでていたので、芸能界にいと云えば誰も疑わなかつたと思う。身長は一八〇センチ近くあり、テニス部に所属していた。テニスの大会に出場すると、他校のファンがフェンス越しにずらりと並ぶため、太陽の応援ができなくて困るといふ話をテニス部の女子から聞いたことがあつた。

何よりも、意識して作れるものではない天性の品の良さがあつた、姿勢や歩き方、仕草などが美しく、所作の一つ一つも凡人離れしていた。

不思議なのは太陽と原が同じグループにいたことだ。太陽は原を良く思つてもいなかつたと思うが嫌いでもなかつたと思う。原は目立ちたがり屋で言葉が悪く、頭も悪かつた。色黒で歯は黄ばんでおり、目つきが悪かつ

た。制服の着方はオタクンに似ていた。身長はそんなに高くなく、一五〇センチ台で、どちらかといえば痩身だった。

両手をポケットに入れて背中を丸めて歩くのが癖で、悪そうな雰囲気がつんぷん出ているため、第一印象で関わりたくないと思った。

男子生徒からはひょうきん者ということで友達はたくさんいたが、その陰湿な性格を多くの女子は嫌っていた。

四月二十三日。朝一番に登校すると、ヒーローの机に白い花が飾られた瓶が置かれていた。黒板を見ると「昨日、多賀啓之君が老人をかばおうとして車にはねられ亡くなりました。今日は学校は休みです」と、先生が書いたような綺麗な字で書かれていた。

僕は、四六時中ヒーローとこまめに連絡を取り合っているわけではないから、事実がどうかは分からなかった。黒板の綺麗な字と「老人をかばお

うとして」という文言は信憑性を感じさせるものがあつたが、どこか違和感があつた。

昨日、帰り道でヒーローと別れた後、そこからヒーローの家までは距離にして百メートルもなかった。その距離でこんな大事おおごとが起きるなら、普通は気付くはずではないのかと思つたからだ。

僕の直感ちかみは黒板の文字を消してしまえと言つた。その言葉に従い、黒板の字を消して、ヒーローの席に飾られた白い花をゴミ箱くみばこに捨て、花瓶を片付けた。

教室に一番乗りした僕の後のちに教室に入つてきたのは原幹則けんねだつた。いつもは始業時間ギリギリか遅刻してやってくる原が、朝早くに登校してきた。僕は何知らぬ顔をして本を読んでいた。

「藤崎！ お前」

原は教室に入つたとたん、一番前の机を蹴飛ばした。机はガラガラと音

を立てて倒れた。その行動によって原幹則は自分が犯人であることを暴露したようなものだった。葬式ごっこを仕掛けたのは間違いなく原幹則だった。

僕はわざと驚いたふりをした。その僕を見て原は、

「藤崎。今日登校した時、何か変わったことはなかったか?」

「変わったことって?」

「教室はこのままだったか?」

「このままだけ」

「そうか。ならいい」

原は、自分が蹴飛ばした机を元に戻した。

おそらく、昨日の放課後に誰もいなかった教室で仕掛けたのだ。そうだとしたら、警備員が校内を巡回しているときにいたずらに気付いて花瓶を片付けたことにおこう。

そう思ったのは、僕が原を怖がっていたからではない。原をまともに相手にするのが馬鹿らしいと思ったからだった。

原は、僕に罵詈雑言を浴びせ、汚い言葉で罵るはずだ。少しでも僕が怖がるように、なおかつ、少しでも自分が目立つように、教室全体が静まり大きな問題となるのを楽しみにしただろう。

原の頭の中には同級生から恐れられる威厳のある存在になりたいという馬鹿げた願いがあるように思えた。正しい理屈で対抗することなど無意味に感じられた。

僕は黙って本を読むふりをした。原に目をやると、原はその細い目で僕をじっと見つめていた。目が合った瞬間、原は僕から目を逸らし教室を出ていった。

登校時間になると、次々にクラスメイトが教室に入ってきた。ヒーローとハカセは一緒に教室に入ってきた。何も知らないようで、お互いに笑い

あっていた。

ハカセは引き出しの中の図鑑を取り出して、その中に挟んでいた虫のスケッチの束を取り出した。いつものように、スケッチの続きに取り掛かろうとしたのだ。その瞬間、今まで笑っていた表情から笑顔が消えた。

「誰だ？　こんなことしたやつは」

そのスケッチの束には一枚一枚赤ペンで大きな丸や三角やバツが付けられており、その上に百点、二十五点、四点など、点数が表記されていた。その点数に基準などなく「よくかけました」とか「この虫は目が死んでます（笑）」とコメントも書かれていた。

ハカセは時間を見つけて虫のスケッチを描き、それを集めていた。このスケッチは、ハカセにとっては中学三年間かけての思い出作りだった。中学三年間のうちに千枚のスケッチを書いてアルバムにして残すという目標があった。

これは、ハカセの中では自分が虫に関して誰にも負けないという誇りそのものだったはずだ。そしてハカセと虫を結びつける絆作りのようなものだったはずだ。ハカセは一匹一匹昆虫を丁寧にも細部まで書き記すことで、凶鑑の中の昆虫達と話をしていたのだ。大人になったらこの凶鑑の虫たちに実際に会いにゆくのが夢だと目を輝かせて話していた。

虫のような言葉を持たない生き物に愛情を持てるのはハカセが優しい性格だったからだ。そして、虫の生活や虫の気持ちをまるで代弁するかのようにならそうに話すのは、ハカセに強い感受性があつたからだろう。実際に虫を採集することもあり、その時のハカセの表情は本当に嬉しそうだった。

ハカセはいつもの優しい笑顔を消して、

「絶対に許さない」

と呟いた。犯人は原だとすぐに分かった。

急に生徒たちが教室から飛び出して校庭の掲示板へ向かって行った。

「ケンカ！ オタクンと原が喧嘩してる」

女生徒の言葉に胸騒ぎがした僕は生徒達が集団で向かう先に走ってついていった。

掲示板の前には人だかりができており、その人だかりの間をすり抜けていくと顔を真っ赤にしたオタクンと原が取っ組み合いになって殴り合っていた。

何があったのかと掲示板を見ると、そこには「スケベ男オタクンのち○ぽこ公開」とマジックで書かれていた。その下には、男性の全裸写真の雑誌の切り抜きの顔の部分にオタクンの顔写真がべったり張り付けられていた。

僕たちは性に対して敏感だった。体臭も気になったし、体毛も気にした。自分の体が大人へと変わっていくなか、女子からしたらこの臭さも体毛も気

持ち悪いだろうと気にした。人だかりの中で何にも気を配らないゴシップ好きの女子生徒が、

「やだあ、超きもいんだけどお」

と楽しそうに笑っているのを見て、僕はこみ上げる怒りを抑えることができなかった。人だかりをかき分けて、原とオタクンが取っ組み合いになっているところへ向かい、オタクンをよけて原のワイシャツの襟元を掴んだ。次の瞬間、僕は原の頬を握りこぶしで殴った。本気で人を殴るとこんなに気持ちが良いものなんだと初めて知った。

僕の心は暴力に対する後ろめたさなど全くなかった。原は言ったところで分からない、殴っても分からない。僕は自分の心が発散されることだけ、ただそれだけのために原を殴った。

原の口が切れて、血が滲み出た。担任の望月先生が騒ぎを聞きつけ止めに入った。

「藤崎！ やめろ。殺すつもりか」

殺そうなどと微塵も思っていなかった。僕が殴るのをやめなかったのは原の目が笑っていたからだだった。人だかりができて周りには大勢の人がいたが、誰も気づかなかったのだろうか。確かに原の目は笑っていた。

その経緯で、担任の先生から僕の母へ連絡が行き、カウンセリングクリニックの三浦先生のもとへ通うことになった。

「ふむ。それで、お母さんは直登君が非行に走ったのではと思ったのですね」
「直登は本当に優しい子で、大人しいし、いつか爆発するはずだと思うっていたのです」

三浦先生は一瞬僕の表情をちらっと眺めた。そして、ふふっと笑い声を漏らした。

「直登君。親というのはね、自分の子どもがひねくれた子でも心配するし、

利口な子でも心配するものだ。面白いね」

そして、母だけ待合室へ行き、三浦先生は僕と二人きりで話をした。

「ところで、君は担任の先生から『辛くても自分自身に負けたらだめだ』とアドバイスを受けたらしいが、それは自分でなぜだと思う?」

「ただの嫌味だと思います」

担任の望月先生の年齢は二十五歳で、教員採用試験には一度で合格したし、出身大学は分からないが、エリートだと噂で聞いていた。望月先生は整った顔立ちで、親が資産家だと聞いていた。身長は百七十七センチ後半位で中肉中背。白やブルーのシャツが良く似合い、肌が綺麗で、眉は自然な具合に整えられていた。ヒゲも薄かった。瞳の黒さと歯の白さが印象的で、一部の女子生徒の間では王子という呼び名がついていた。

「君は望月先生に嫉妬していたのかい?」

「嫉妬ではありません」

嫉妬など、変な誤解だと思った。今まで色んな先生にお世話になってきた。僕は先生という存在に尊敬の念を抱いてきたのだ。小学生の頃に児童に対して親のような愛情を向けてくれた先生。授業を教えるのがものすごく上手い先生。常に笑顔を絶やさないう先生。厳しく叱りながらもその言葉の中に大切な本質が散りばめられた温かな先生もいた。

僕は、そのような大人に接すると尊敬の気持ちを抱かずにはいられなかった。

僕の間感だが、今まで大人に対して目に見えないベールの存在を常に感じていた。大人は経験の中で僕が知らない痛みの乗り越え方や、困難に処する考え方、哲学などを持っているものだと思っていた。そしてそれは、深い傷や痛みを乗り越えることで得られる対価のような気がしていた。だから、大人の言葉には温かさやユーモアが溢れているのだと感じていた。だが、望月先生だけは違ったのだ。こんな感覚は初めてなのだが、望月

先生の考えていることは手に取るように分かる程薄っぺらいものだった。エリートだと言われている割には授業が下手で、努力している要素がない。男の割にはお喋りで、その話の内容に配慮がないのだ。

大人しく優しい太った男子生徒に「不細工」と言ったり、不良と呼ばれる生徒の前で「先生は小学生のころから煙草を吸っていた」と言ったりした。

本人としては、笑いを取りたいという気持ちや、カッコいい印象を与えたいという気持ちがあったかもしれないが、笑いに対するセンスの無さ、カッコいいと思いついでいる感覚が僕ら中学生と変わらないこと。小学生の頃から煙草を吸っていたというのは嘘だったと思う。それらを目の当たりにするたび、望月先生に対する眼差しは急速に冷えていった。

校長先生から注意を受けたという噂もあったが、その後も配慮のない発言が続くを見ると、上手く言い逃れをしていると思わざるを得なかった。

極めつけは、「勉強をする意味」についてこう話した時だった。

「これからの社会は厳しいから、学歴が無ければ勝者となれない。敗者になりたくないならとにかくいい成績を取るんだ」

まるで、コマーシャルの予備校の講師の言葉にも感じたが、その時に僕はこう質問したのだ。黙っていればいいものを、衝動を抑えきれずに立ち上がって、大きな声で。

「望月先生。勝者と敗者とは何で区別するんですか？」

望月先生はこう話した。先生は小さい頃、権力の犠牲になりかけたことがあったと。親父がまだ社長という役職に就いていない頃、親父は会社の不正を見つけてそれを告発しようとした。しかし、逆に言われもない罪を被せられて逮捕されるところだった。その時に誰も親父の味方をしてくれる人はいなかった。その時の親父は敗者だ。

その後、親父が見事返り咲いて社長という役職に就くと、逆に誰もが親

父を羨望と尊敬の眼差しで見た。その時の親父が勝者だ。

君達は社会に出て生きていくだろうか？ 社会や世間というのは、何で君達を判断すると思う？ 君達に力がなければ、それこそ、目に見える肩書きなどがなければ、正しいことをしても罪人扱いだ。そして、成功して初めて、安定を手に入れることができる。君たちは守られているが、社会に出ると誰も守ってくれやしない。綺麗ごとなど通用しないぞ。とにかく、まずは学歴だ。

その話を聞くと、クラスの雰囲気は静かになった。かと思えば、原が手を叩いて賞賛し始めた。美談に感じたのか、原に続いて数名の生徒が手を叩きだした。

「先生の実績は間違っている。不正を告発して闘おうとした先生の父親は敗者じゃなかったはずだ」

僕の言葉に再び教室は静まり返った。四方八方から、突き刺さるような

視線を感じた。望月先生は、黒板を消す手をピタリと止めた。

「黙れガリ勉。まずは学歴だ。お前が一番よく知っているだろう?」

原がそう言うのと、教室はドツと大きな笑いに包まれた。望月先生は微笑みながら振り返った。

「藤崎君。君の言うことはもつともだね。先生から、一つ質問いいかい? 君にとって敗者とはなんだい?」

「自分自身に負ける生き方をする事です」

望月先生は、こう話した。自分自身に負けると言うが、自分自身に負けたと思っているコンプレックスの塊のような人間が人の為に役立ち多くの人を救う場合があるだろうか? 堂々と自信に満ち溢れていても、些細なきっかけで全てを失い、その時に初めて自惚れていたただけだったと自分の器を知る人もいるだろうか? 勝ち負けは自分が決めることじゃない。敗者に定義などないんだ。一つだけ、分かりやすい見極め方がある。周囲にみつ

ともないという印象を与えた時。その時周囲はその人を敗者だと感じるんだよ。

そして望月先生は「みつともないという印象」という言葉の後、ハカセ、ヒーロー、オタクン、僕の顔を順番に見ていった。

僕は何も言い返せなかった。一瞬、この大人も他の大人同様、何か深い根拠を背負っているのだろうかと思ってしまうほどだった。

「それから、望月先生は僕に対して冷たい態度をとるようになりました。原を殴って呼び出された後の『辛くても自分自身に負けたらだめだ』というセリフは、嫌味にしか聞こえませんでした」

三浦先生は僕の話聞いて、カルテにサラサラとメモを取った。

「それで、直登君。今は望月先生に対する見方はどうなったかい？ 君がさっき話してくれたように、望月先生も謎のベールに覆われているような

不思議な感じはしたかい？」

「不思議な感じはします。でも、ああいう風にはなりたくない」

「君にとつては残念なことだが、これからは、今回のようなことが頻繁に起こってくるだろう。つまり、今までのように尊敬できる大人ばかりではなくなってくる。それが何故だか分かるかい？」

三浦先生はこんな話を聞かせてくれた。中学三年生という時期は思春期の真っ只中だね。思春期になると、脳も発達していくんだ。君が成長して賢くなつていく以上、どうしても今までのように物事の本質に鈍感なままでは過ごせなくなつていくんだよ。まず、眼窩前頭皮質がんかせんとうひしつ。思いやりの領域を増やそうと働きかける組織だ。何が正しいかにこだわるのは、君の中で少しでも人を傷つけたくないという意識が発達してきたからだろう。

次に合理性を判断する背外側部はいがいそくぶ。これは損得勘定で物事を決める役割を持っている。背外側部が発達するにつれ、君の中には冷静さが備わると同

時に、心が冷たくなってしまったようなそんな感覚が増えていくだろう。

そして、上側頭部^{じょうそくとうぶ}。これが発達すると、空気を読んで自らの振る舞いを決める能力が高くなる。社会性を身に付けるために必要なことだ。君が今、嘘をつくことに嫌悪感を抱いていたとしても、上側頭部が発達していくと、次第に上手に嘘をつくようになる。目上の人にペコペコもするし、嫌なお客さんにも愛想笑いを浮かべるようになる。正義感を堂々と掲げることに関して、十年後の君は、とても今の君には敵わないだろう。

君は大人を見るときにベールののようなものを感じると言ったね。それは、脳の発達により経験する大人特有の葛藤を感じ取ったのかもしれない。

「これは、どうやったたら防げるんですか？」

「体の仕組みには逆らえない。大人になることは逆らえないことなんだ。楽に生きていく方法はある。君は、大人が機械的に生きているように見えはしないか？」

「確かに。みんな同じことを言って、体裁ばかり気にして」

「それを心理学の世界でいうと『自動機械化』という。私たちは二つのパターンのどちらかを歩むことになる。すなわち、他者を軸として生きる『悪い自動機械化』と、自分を軸にするところから始まる『いい自動機械化』だ。嫌な表現だね」

三浦先生は僕の顔を覗き込んで、様子を伺った。僕の目は少し反抗的な目をしていただろうか。三浦先生は、こう言った。

「君はだいぶ苦労するぞ」

僕はカツとなって黙り込んだ。自分勝手な分ならず屋と罵られた気分になつたからだ。

三浦先生は席を立って、大きな画用紙一枚と2Bの鉛筆二本と消しゴムを用意した。そして、隅に立てられてあつた木製のイーゼルを僕の前に置いた。

「今日のカウンセリングはこれで最後だ。君の精神状態を図るために、私の表情をデッサンしてくれ」

僕は言われたとおりに三浦先生の表情をデッサンした。昔から絵を描くのは得意で、何度か入賞したこともあった。僕は三浦先生を驚かせてやろうと思つて、真剣に手を動かした。その間、三浦先生は穏やかな表情を浮かべていた。

豊かな白髪はくはつ、首から肩までの体格の良さ、輪郭までは良い出来だった。肉付きの良い鼻と微笑を浮かべた唇を描くあたりから、少しずつ難しくなつた。最終的に奥二重で目尻が下がっている形を線描で描いた後、その瞳を表現するのに苦労した。淡さ、深さ。黒く塗りつぶした後、ふさわしくないような気がしてまた消した。結局、瞳孔を濃く塗って、虹彩だけはつきりさせて、角膜は非常に薄い調子をつけた。仕上がった絵を見せると、三浦先生はそれを真剣な眼差しで眺め、何度か頷きながら、嬉しそうに目

を細めた。

「直登君。君は、デッサンの練習をしたことがあるのかい？ 大した腕前だね」

「僕は絵を描くことは好きなんです」

「すごく誇らしい気持ちになった。」

「君はだいたい苦労すると言ったろう。それは間違いないらしいな」

「先程と同じ言葉なのに、今度はまったく嫌な気がしなかった。」

「君は感受性が強いって、誠実に物事に取り組むだろう。大人になることは物事の本質に気付くことだ。君の場合、色んなことが見えすぎて何がなんだか分からなくなるぞ。人よりも自分の生き方を見つめるのに苦労するに違いない。それでも、いい大人になる」

それから三浦先生は、サラサラとデッサンを描いて僕に渡した。

「いつか辿り着く君の姿を想像した」

絵の中の僕は、綺麗に晴れた空の下、広い草原の中で、白いシャツの袖をめくって立っていた。片手をスラックスのポケットに突っ込んで、もう片方の手で葉っぱを掴み、口にくわえていた。

技術の高さ、表現力が見事だった。この絵を見ると「自由」という言葉が浮かんだ。何より嬉しかったのは、絵の中の僕が三浦先生の若い頃を想起させたことだった。

事件から数日が経ち、僕ら四人はクラスの中で益々浮いた存在となっていた。誰も話しかけてこなくなり、孤立していった。五月の帰り道のことだ。

「なんか俺ら惨めだよな。やつぱり見た目か？」とオタクン。

「間違ったことはしてないから堂々としてりゃいいんだよ、なあ藤崎」とヒーロー。

「僕は悔しい。クラスの奴らと原をギャフンと言わせてやりたい」ハカセは呟く。

「確かに、このままでは終われないよなあ。」と僕。

その時、佐良太陽が自転車に乗って後ろからチャイムを鳴らした。僕は振り返った。

「太陽。今日部活は？」

「休み。腱鞘炎になりかけていて、しばらく安静だ」

「一緒に帰ろうぜ」とオタクン。

人見知りのハカセは太陽とあまり関わりがなく、黙り込んでしまった。

僕らは、太陽を交えた帰り道で、今の立場を逆転する方法を思案しだした。

「太陽からみて俺達の欠点は？」ヒーロー。

「何も悪くないさ。話もお前たちの方がずっと面白いよ。後はパフォーマンスだな」

「パフォーマンス？」僕ら四人は声を合わせて聞き返した。

「毎年この時期に校内ビデオコンテストがあるだろ？それで優勝したらどうだ？」太陽。

「ビデオンかあ。確かにビデオン優勝者となると一気に華がでるよな」と僕。
「校内の有名人だもんな。それに、優勝するのは大抵三年生だし」とヒーロー。

「僕らだけじゃだめさ。太陽も一緒じゃないと」ハカセが口を開いた。

「もちろん協力するよ。五人で出よう」

「あれって上位は大体映画だよな。脚本なんかはどうするんだよ」オタクン。
「映画となるとコストもかかるし、内容がつまらなければボツだ。人数も五人だから地味な仕上がりだろうな。漫才だとすべりそうだし」ヒーロー。
「プロモーションビデオはどうだ？人気ミュージシャンの曲をカバーして、演出するんだよ。オタクン、歌上手いんだらう？」太陽。

「楽器は誰も弾けないよ」僕。

「そんなの、カラオケを流せば良いんだよ。後はエア・演奏で、弾いてい
るふりをする。そして、ハカセは女装する」太陽。

「なんで僕が」

「面白い」オタクン。

「ハカセ、顔立ち整っているもんな。逆にその辺の女子より綺麗になるぞ」
ヒーロー。

「僕がメイクを担当するよ。美術系は得意なんだ」

「ヴィッグと服は姉貴から借りる。清楚系からセクシー路線まで一通り揃っ
てる」太陽。

「僕は絶対嫌だ」

ハカセはそう言ったが、ハカセ以外の四人の中では決定事項として話が
進んでいった。

「ギャフンと言わせたいならとことん格好良きこうぜ。ビデコンは六月開催だ。あと一カ月。時間は十分あるぞ」太陽。

僕ら五人は、それから毎日ビデコンの企画を練った。休み時間も、放課後も、五人で集まって案を出し合って、少しずつ形を整えていった。

放課後、お金を出し合ってカラオケボックスでオタクンの歌のレッスンも始まった。候補として、ONE OK ROCK、RADWIMPS、BUMP OF CHICKENがあがったが、ハカセが女装をするということでメンバーに女性がいるSEKAI NO OWARIの『Dragon Night』に決まった。セカオワのピエロマスクは楽天市場で二千三百円で売っていたので、四六〇円ずつ出し合って、愛想のないヒーローがこのマスクを被ることになった。

しかし、ここで問題が浮上した。セカオワのメンバーは四人なので、一人外れなければいけない。僕ら四人が脚光を浴びるのが目的だが、どうし

でも太陽を引きぬくわけにはいかなかった。そこで太陽は、得意の英語を活かして、プレゼンター役を行った。

楽器は吹奏楽部から借りて、基本的な撮影は手が空いている太陽が担当することになった。僕は毎朝、母に頼んでメイクの練習をさせてもらった。母は、あまりメイクをしない人だったので、僕の施すメイクを喜んでくれた。メイクの基本はユーチューブを見て学んだ。お金がないので、母の化粧品を借りたり、百円均一で色んな化粧品を試してみたりした。母は、どうせ買うつもりだったからと言って小遣いをくれた。

太陽の影響でオタクンは目に見えて格好良くなっていった。ごわごわした髪は太陽行きつけの美容室でさっぱりと整えた。安いワックスで簡単にアレンジする方法も教えてもらったと実践していた。制服の着方もシャツのボタン上一つ以外は全て留めて、スラックスにインした。相変わらずスラックスは腰で穿いているのだが、ベルトが見えるため引き締まった印象

になった。そのベルトも、以前はドクロをモチーフとしたものだったが、シンプルなものに変えて、清潔感が増した。オタクンは鏡を見る回数が増えて、百円均一で化粧水を買って毎日手入れをするようになった。一度はまるとそれに没頭するからオタクなんだよねと、僕らは口々に言っただけ。しまいには、脱毛までしようとしていたので、さすがにそれは全員で止めた。

しかし、オタクンの肌は手入れを始めて二週間ほどで透明感が始め、ニキビが目立たなくなった。オタクンの美に関しての成長は著しかった。何より、穴の開いた靴下を履くこともなくなった。

その様子を面白くなさそうな顔で見っていたのが原だった。僕らがいつものように楽しく計画を立てていると、原が教壇に立って太陽を罵り始めた。「太陽、最近どうしたんだよ。すっかりオタクの一味になってしまった」「楽しいんだよ、こいつらといると」太陽。

「最近、どんな噂が立っているか分かるか？ ひでえ噂でさ。聞きたいか？」
原が汚い暴言を用意していたのが分かった。教室が静まり返った。その時太陽が、

「原。一時間目の体育の授業終わってからずっとチャック全開だぞ」

と言った。一斉にクラスメイトは教壇に立っている原を見た。原は慌て後ろを向き、チャックを確認した。

「なんちゃって」太陽がふざけて言うのと、静まり返った教室に笑いが起きた。「でもお前、本当によくチャック開いているぞ。壊れているなら直せよ」ヒーローが言うのと、また教室に笑いが起きた。原のチャックがよく開いていることは口にはしないものの、皆気付いていた。原だけが誰にも気づかれないかと思っていたらしく、それが僕らからしたら滑稽だった。

原は教卓をガンと蹴飛ばして、クラス中をにらみ付けて教室から出ていった。シンとした教室は「何あいつ」「感じ悪い」という声でざわつき

始めた。

その日の放課後、僕達が帰ろうとすると、クラスメイトの山崎玲奈が話があると言って僕だけ呼び出した。泣き出しそうな顔をしていたので、四人には教室で待ってもらおうように言って、彼女の話我非常階段で聞いた。山崎の話はこうだった。四月二十三日の前日に原に呼び出され「黒板にヒーローが老人をかばって亡くなったということを書け」と言われた。放課後に誰もいなくて怖かったため、原の命令を断り切れなかった。でも、翌朝教室に入るとそれが消されていてホッとしたんだと。

山崎は達筆でとても字が綺麗だった。小学一年生の頃から習字を習っていて、母親が書道教室の先生をしていた。あの綺麗な字は山崎に頼んだのか、と合点がいった。

山崎はその話を担任の望月先生に相談した。あの騒動で、僕が原を殴ったのには理由があったんだと。原はそれ以外にも万引きや、恐喝を繰り返

しており、もし今度また変なお願いをされたらどうしたらいいのか。原の父親はPTA会長をしているし、世間ではよく知られた人だ。教育に熱心なはずだから、原の父親に話してみてくれないか、と。

「望月先生はなんて言ったんだ？」

山崎はこう続けた。望月先生は、このことは秘密にしておきなさい、と言った。その噂は既に耳にしている。しかし、もしそれが証明されてしまうと原は間違いなく少年院送りになるだろう。少年院は青年を更生させる場所ではない。少年院の再犯率は四割という数字から見ても分かるだろう。そんなところに送り込んだら原の人生はどうなる？ 若い頃の過ちはいずれ気付くときに気付くものだ。ましてや原の父親がそれを知ったらひどく悲しむだろう。原の父親は熱心だからな。何か言われたら、先生に相談しなさい。そう言われてその日の話は終わったと。

そして、最近、また原から頼まれごとがあった。オタクンに恥をかかせ

ろと。言いくるめて髪を丸坊主にさせるとか、私がオタクンに殴られて怖かったという噂を十人に広めるとか。期日も設けてきた。なぜ私がこんなことしないといけないのか、望月先生に相談した。望月先生は原に直接話して聞かせると言った。

次の日、原がこう言ってきた。「山崎チクツたな」。信じられないのはこの後。原の父親は原が万引きをしていることも、恐喝を繰り返していることも全部知っている。通報されたこともあるが、その事実はいくらでもみ消せる。望月先生が俺を少年院に送り込めない本当の訳は、親父は学校に多額の寄付をしていて、修学旅行の費用や部活の遠征費を賄っているからだと。俺は守られているんだよ、でももうお前には頼まないから安心しろ、と。望月先生は信用できないし、私の考えでは今度は誰かが犠牲になると思う。どうしたらいいんだろう——。

その話を聞いた僕は、山崎がすごく怖い思いをしただろうと察した。そ

して、話してくれたことが嬉しかった。

「山崎今日一人で帰るのか？ 僕は五人で帰るけど家まで送ろうか？」
「友達が待つてる。悪いけど、藤崎君達には関わりたくないの。でも、みんな藤崎君達の味方だよ。聞いてくれてありがとうね」

教室に戻ると、オタクンがニヤニヤしながら「遅えじゃねーかよ」と言った。太陽は、「告白という感じではなかったな。何を相談されたんだ？」と言った。僕は山崎から聞いた一連の流れを話した。オタクンが怒り狂って仕返しを考え大事おおごとにならないか心配だったが、オタクンの反応は意外だった。

「なんだ原のやつ。俺に嫉妬してたつてことだろ？」

つまりはそういうことだが、この余裕はどこから来たのだろうか。

「それにしても、あいつ意外と可哀想なんだな」ぽつりとオタクン。

「今の発言は許せないね。クズ人間に同情する価値なんてない」ヒーロー。

「何がなんでも少年院に送り込んでやりたいね」ハカセ。

「それはどうして？ ハカセ」太陽。

「とにかく嫌な思いをしたらいいんだ。惨めになつて弱くなつたら大人しくなるだろう。一生大人しくしていればいい」ハカセ。

「それは違うんだよ」僕。

「原の父親は本気で愛情なんて注いでいないってことだよ。見栄とか体裁とかそればかりでさ。望月先生も叱らない。誰が原に本気でぶつかつてやるんだよ」オタクン。

ハカセは唇を尖らせた。

「みんな原の味方をするのかよ。悪いことをしたら罪を償うことが筋じゃないのか？ 誰も本当のことを言ってくれないからこそ、悪いことは悪いと正してくれる環境が必要なんじゃないのか？」ヒーロー。

「ヒーローの意見に賛成だ。どうにかして、僕らで原が自ら罪を償う道を

選ぶように後押しできないだろうか」僕。

「ビデオンで優勝したとする。俺らは校内の有名人になる。原の弱点は権力とか人気には弱いということだ。あと一つ、原の弱点は思いやりに慣れていない。とにかくビデオンで優勝した後、原の心を動かすんだ」太陽。

「そのシナリオは完璧なのか？」オタクン。

「知らないよ。取りあえず、やってみるんだ」太陽。

そして、六月二十日。校内ビデオコンテストの開催日が訪れた。

会場となるのは体育館だ。カーテンで日光が遮断されていたが、天井からの照明で館内は明るかった。舞台には大きなスクリーンが用意された。登校時間を過ぎると、八百名にのぼる全校生徒が次々に集まってきた。

始業のチャイムと共に校長先生の挨拶が始まった。校長先生は足が短く、小腹が出ており、ポマードかなんかを塗っているのか、いつもテカテカ光る薄い頭をしていた。挨拶は元気よく、大きな声するのが特徴だ。普段

はそんなに注目されないが、今日は校長先生が舞台に出てきた瞬間に大きな拍手が沸き起こった。校長先生は嬉しそうに大きく手を振った。その後、体育の主任がビデオコンの主旨について説明した。

校内ビデオコンテストは、各学年から五組ずつエントリーされ、合計十五組で競い合う。学年別であれば、クラスが違ったもの同士がチームを組んでも構わないし、何名で構成しても構わない。審査方法は、事前に制作していたビデオ映像をスクリーンに流す。一組当たりの制限時間は三十分以内。全校生徒と先生方で投票し、投票数が最も多いチームを優勝者とする。準優勝、三位までは図書券と賞状が贈られる。六位までは入賞として賞状が贈られる。他に、審査員特別賞があり、エントリーした全員に参加賞が与えられる。結果は後日、発表する。

各学年順に整列するのだが、僕らエントリー者は前の方で席を取ることが許された。

「順番は？」ハカセ。

「最後から二番目だ」僕。

吹奏楽部がトランペットを口にくわえ、ウイリアムテル行進曲の序盤だけを演奏した。その短い演奏が終わった瞬間、体育館内の照明が落ちて真っ暗になった。一齐に歓声が起こった。スクリーンに映像が映されると、すぐに会場は静まり返った。

トップバッターは一年生三人組だった。日本舞踊を披露していて、化粧の仕方や着付けからみても、小さい頃から日本舞踊を習っている子達だとすぐに分かった。小さい体で、美しく踊るので、かわいかった。ビデオが終わると会場から温かな拍手が飛び交った。

その後、漫才、映画、大道芸、手品、ファッションショー、バンドなど、様々なジャンルの作品が続いた。僕たちが意識したのは、映画を制作した三組だった。映画制作にはシナリオ、演出、稽古などが必要だが、新学期

が始まって約二カ月の期間でそれを完成させること自体が至難の業だ。大抵は前年から仲間たちがコツコツ作り始めていて、新学期が始まる頃には完成しているというパターンだと思った。例年、上位を独占するのは映画を制作したグループだった。この三組のうち、二組は二年生で、一組が三年生だった。三年生は中学最後の思い出となるためか、優勝候補となりやすい傾向があった。次に、同じジャンルであるバンドも注意しながら見ていた。音楽を扱うグループは四組と多かったが、歌い慣れている割に選曲がイマイチなことや、賑やかではあるものの芸に走りすぎて歌自体はひどかったりしたため、なんとなく大丈夫な気がした。

午後の三時を回り、僕らの番がきた。

スクリーンに太陽が映し出されると、会場内から黄色い悲鳴のような歓声が上がった。太陽は父から借りた上質のスーツに身を包み、伊達メガネをかけていた。かつらを被って英語でプレゼンテーションを始めると、そ

の下に字幕が表示された。

「ハイ、みなさん。ビデオ楽しんでるか？今年、ビデオに史上最強やばい奴らが登場する。間違いなく優勝候補さ。校長先生、救急車の手配は済んでる？みんな、オタクをなめんなよ！」

そして、スクリーンにはオタクンが映し出され、セカオワの『Dragon Night』を歌い出した。実は三回ほど撮影したのだが、一番初めのものを使うことにした。というのは、オタクンは回数を重ねるにつれ感情を込めすぎて酔いしれた印象になっていくため、緊張感のある一番初めのものがないと多数決で決まったのだった。

後輩は太陽以外、僕らのことなど知らなかったと思うが、三年生は僕ら四人だと分かったみたいだった。オタクンが歌い始めると静かに聞き入り、間奏に入った瞬間に指笛や拍手が沸き起こった。オタクンは、元々透明感のある大人っぽい声の持ち主で、ブレスが絶妙で、ビブラートも効いてい

た。その上一生懸命練習していた。間違いなく、校内でトップレベルの歌唱力だと思った。会場からは手拍子が起きた。

ピエロマスクを被ったヒーローが映し出されて、僕も映し出された。ヒーローに関してはピエロマスクを被って正解だったと思った。僕らは撮影が終わった後、全員笑顔だったが、ヒーローだけ普段と変わらない硬い表情だったからだ。ヒーローにピエロマスクを被ってもらうことで愛嬌面は見事カバーできた。

そして、ハカセが映しだされた瞬間、笑いが起きた。本当にハカセは可愛かったのだ。もちろん、僕もメイクを勉強したけれど、色白でキメの整った肌に、長い睫毛。小さく筋の通った鼻。薄く桜色の唇。メイク映えする顔立ちに、ひよろりとした体型。ハカセもあんなに嫌だと言っておきながら、まんざらでもない様子で鏡を見ていた。さらに、恥ずかしそうに下をうつむくのだが、太陽はハカセが上を向く瞬間ごとを見事に捉えていた。

ハカセがスクリーンに映るたびに、女子から「可愛い」という声が上がった。曲が終わると、最後に太陽が英語で締めた。

ビデオが流れ終わった瞬間、割れんばかりの歓声が起こって、僕にとってはその日一番の盛大な歓声に感じられた。すべての上映が終わって、全校生徒は投票を終えた人から下校した。

帰り道、僕らは大はしゃぎで成功を喜んだ。

「今日はジンジャーエールでお祝いだ」オタクン。

「実はさ、オタクンにファンクラブができかかっているって噂を耳にしたよ」太陽。

「嘘だよ」ハカセ。

「テニス部の女子から直接聞いたんだ。最新情報だよ」太陽。

「虎の威を借る狐効果だな。虎は太陽様のことだ」僕。

オタクンは特に舞い上がる様子ではなかった。

「なんとなくそんな気配は感じていた」オタクン。

ヒーローは冷たい視線をオタクンに投げかけこう言った。

「今までモテなかつた奴が急にモテ始めると勘違いしだすらしい。正直、距離を感じる」

その時、待ち伏せをするように、曲がり角で誰かが立っていた。原だった。原は無言で、僕らをじつと見つめた。今までとは違って静かな眼差しだった。目つきの悪さは相変わらずだったが、敵意は感じなかった。

「原。お前の親父は最悪らしいが、お前にはお前の人生があるからな」僕。「何が言いたいんだ藤崎。同情しているのか？」睨みつける原。

「大人しく少年院に行けと言いたいんだよ」ハカセ。そのハカセを肘で強くごついて「バカ」と窘めるたしなヒーロー。

弱い人間だと思われるのは原にとっては屈辱以外の何ものでもないはず

だった。

「同情なんかしてないさ。友達だから言っているんだ」僕。

それを聞いた原は「そうか、悪かったな」と言ってお僕らに背を向けて帰っていった。

「原が謝ったぞ」オタクン。

「なんでさっきごついたんだよ、ヒーロー」怒り出すハカセ。

「いつもと様子が違ったじゃないかよ。鈍感」ヒーロー。

後日、ビデオコンの結果が発表された。優勝したのは、僕らオタク組だった。それから僕らの周りはいよいよ賑やかになったが、原は学校に来なくなつた。そして、原の転校が決まった。噂では連日、防犯カメラに映るようになり、少年院に送られることになったということだった。その噂を聞いた日

の帰り道だった。

「根っからの悪党だったんだ。一瞬信じそうになったよ。馬鹿な俺」ヒーロー。

「良かったよ、少年院送りになって」ハカセ。

「結局響かなかったんだな」寂しそうなオタクン。

すると、太陽が何かに気付いた様子で「静かにしろ。原がいるぞ」と言った。僕らはその原の横を何も言わずに通り過ぎようとした。

「今までごめんな。お前らをからかって」

原の言葉に僕たちは一斉に振り返った。

「なんでお前、万引きを繰り返したりしたんだよ。わざと防犯カメラに映ったりして。世の中をなめるのもいい加減にしろ」ヒーロー。

「こうするしか方法が無かったんだよ」原。

「藤崎。ありがとな。友達だと言ってくれて。嘘でも嬉しかったよ。じゃあな」

手を振って背を向ける原に、太陽が、

「原。今度はお前も俺達と一緒に……」

と言いかけたとたん、原は振り返って目をさらに細くして笑顔を見せた。「僕たちは友達だ。嘘じゃないぞ。元気だな」僕は大きな声ではっきりと伝えた。

原の姿がどんどん見えなくなっていくと、寂しい気持ちがあった。

「ごめんみんな。なんか僕、勘違いしていたみたいだ」ハカセ。

「俺もすっかり誤解していた」ヒーロー。

こうして僕らは中学生生活最後の夏を迎えようとしていた。

家に着くと、母が心配そうな表情を浮かべて僕を迎えた。

「直登。三浦先生がね、末期の癌で入院しているらしいわよ。会いにいったら？」

僕は激しい胸騒ぎに襲われた。急なことのよう感じたからだ。数カ月前まであんなに元気な様子だったのに。

「母さん、明日学校休んでいい？ お見舞いに行きたいんだ」

「いいわよ。あまり長居したらダメよ」

「何か、持って行った方が良くいかな。果物とか、ケーキとか」

「お花にしなさい。香りが強くないものを」

翌日、学校を休んで僕と母は三浦先生が入院している大病院へと向かった。途中、花屋に寄った。店員さんに任せたとこ、白と赤を避けたドライフラワーなら好きなものを選んでいいというので、エンジェルパールという淡い紫色のドライフラワーを選んだ。

この色が、三浦先生によく似合っている気がしたからだ。

駐車場に着くと、母は「行ってきなさい」と言った。

「母さんは行かないの？」

「お見舞いに来てほしくない人もいるから。母さんはここで待ってるわ」
僕は受付に行つて、三浦先生の病室を教えてもらい、面会することができた。病室に入ると、三浦先生は起きていて、隣に奥さんらしき人が立っていた。三浦先生は以前に比べべるとだいぶ痩せており、病衣から除く鎖骨は窪んでいた。僕は笑顔で挨拶した。

「直登君」

三浦先生は嬉しそうに目を細めてくれた。

「話は伺っていますよ。三浦の家内です」

付き添いである三浦先生の奥さんは穏やかに挨拶してくれた。その瞬間、僕は涙が止まらなくなつて、三浦先生に花と手紙を渡すだけで精一杯だった。三浦先生は、「君が読んでくれないか」と言った。僕は、泣きながら手紙を読み上げた。

三浦先生。末期の癌だとお聞きしました。残念でなりません。僕の祖父

は幼い頃に他界しましたが、三浦先生はまるで僕の祖父のように身近に感じました。大人に対して疑いの眼差しを向け始めた僕にとって、三浦先生は方向を指し示してくれる光のように感じたのです。だから、これからも色んなことを教えてもらいたかったのです。導いてくれる大人に出会えたと思った矢先のことだったので、不安でなりません。失礼だと思いますが、鉛筆でもなんでもいいので、寂しくなった時に三浦先生を思い出せる何か。形として残せるものを一つ下さい。

三浦先生は、それを聞いて「形見か。君は私が死ぬと思っているのかい？」と聞いた。

僕は三浦先生の顔を見つめた。

「私は明日、退院するんだ。しばらくの間家で過ごして、リハビリを始める。仕事に復帰できるのは早くて一年後だろう」

「ということは」

「大丈夫だ。心配かけてすまなかつたね。君の手紙に返事を書こう。紙と鉛筆をくれ」

三浦先生の奥さんが引き出しから紙と鉛筆を用意した。三浦先生はパープルカラーのリーディンググラスをかけて、十分ほどでサラサラとメツセージをくれた。手紙にはこう書かれていた。

直登君

この手紙は私の今の年齢、君が七十歳を迎えるまで大切にしてくれと嬉しい。君は大人になって、やがて優しい奥さんと可愛い子どもに恵まれるだろう。守りたいものができたとき、君にも迷いがでてくるはずだ。その時から、正解を見つけようと色んなことに手を出すのではなくて、正解のない中を生きること慣れるよう心がけなさい。いつか必ず出来るようになる。壁にぶつかって苦しい時は、自分のことを大した人間じゃない

と思う気楽さをお勧めしたい。強い信念よりも君を守ってくれるはずだ。カウンセリングが必要でなくなっても時々遊びに来なさい。いつも君のことを応援している。 三浦紀之

「療養中、私に会えなくて寂しい時はこの手紙を読みなさい」

僕は笑顔で、お礼を言った。「縁起でもないことを言ってしまったて申し訳ありません」と謝ると、三浦先生は「とんでもない、本音が聞けて嬉しかったよ」と言ってくれた。

病室を後にし、母が待つ車へと向かった。助手席に座ると、三浦先生は回復に向かっており明日退院し、リハビリを経て一年後仕事に復帰する予定らしい、と話した。

「そう。回復に向かっていらっしやたのね。良かったわ」

「僕は縁起でもないことを言ってしまった」

「母さんが誤解させたのが悪かったのよ」

「形見を下さいと言ってしまったんだ」

「そんなこと言ったの？ 失礼にも程があるわ」

母は怒った表情を浮かべ、呆れた目で僕を見た。

「母さんが死ぬって言ったから」

「そんなこと一言も言っていない。末期の癌だとしか言っていないでしょ」
どちらにせよ、まずいことを言ってしまったと反省した。

その三カ月後、三浦先生がお亡くなりになったという知らせを聞いた。身内だけの通夜に僕も参列させてもらった。僕の胸にはどうしようもない寂しさと同時に、あの時お見舞いに行けたことだけでも救われる何かがあった。この別れは仕方のないものだとしても、あの時に三浦先生から頂いた手紙の存在がその時の僕の心を支える為に必要不可欠な物になったからだった。

夏休みも終わり、二学期が始まっていた。

登校するとオタクンが「今日から太陽は部活に復帰するんだってさ」と話した。

「そうか。もう一緒に帰ったりできないんだな」僕。

「藤崎。なんで今日は元気がないんだ？」ヒーロー。

「ちよつとな」

「クールぶりやがって」オタクンはそう言って、僕の脇腹をくすぐった。

「やめろ、笑う気分じゃないんだ」それでもオタクンはやめようとしなない。

僕は笑い声を上げながら泣いた。それを見て、ヒーローが「オタクン、よせ」と止めた。

「藤崎大丈夫？」ハカセ。

「悪かった。ごめんな」オタクン。

「どうしたんだよ。大丈夫か？」ヒーロー。

「大丈夫さ。一週間もすればまた元気になる。それまではそっとしておいてくれ」

一週間の間、三人はジュースやアイスを買ってくれたり、無理に話させようとすることはしないものの、ずっと傍にいてくれた。そして、自分達は勝手に盛り上がって好きなようにしていた。その間、僕に対する悪い冗談はなく、常に気遣いの言葉をかけてくれた。何も言わなかったが、仲間の存在に居心地の良さを感じていた。

学校では同級生や後輩から声をかけてもらえる存在になっていたのも、元気を取り戻すのにそう時間はかからなかった。それに、ハカセやオタクンはしょっちゅうメソメソ、クヨクヨしていたので、彼らを励ましているうちに僕も自然と元気になっていった。

笑えるようになるのと、僕らはまた面白いことを計画しようと夢中になって色んなことに取り組んだ。オタクンのファンクラブは太陽の情報通り結

成され、中学三年の二学期の終わりに近づくと、オタクンに年上の彼女ができた。

「どうせ熟女だろ」ヒーロー。

「お嬢様学校に通う、高一のミス候補さ」オタクン。

「デートで昆虫採集すると盛り上がりそう」ハカセ。

「大切にしろよ。性欲の強さは二年間は隠し通すんだ。それだけで気持ち悪さはなくなるはずだからな」僕。

「藤崎。最近優しくしてたら調子に乗りやがって」

そう言っつて、オタクンは僕の脇腹をくすぐった。僕は大声で笑いながら、オタクンに「ごめんごめん」と謝った。何はともあれ、前を向いてやっていけるさ、と思えた。

教室の窓から外の景色を眺めると、涼しく晴れた青い空の下で、草原のような野原が広がっていた。僕の心はそこに立って、自由のために歩き出

そうとしていた。

いつかのデッサンの中で目にした、僕が辿り着くはずの未来を目指して。

(了)